AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2016.10) 平成27年度:74.

患者が入院前に安全に薬剤を中止するための入退院センターでの取り組み～薬剤に関するインシデントから患者・家族への関わりを考える～

榎園 千恵美, 辻崎 ゆり子

患者が入院前に安全に薬剤を中止するための入退院センターでの取り組み
～薬剤に関するインシデントから患者・家族への関わりを考える～

旭川医科大学病院　入退院センター
○榎園　千恵美、辻崎　ゆり子

【背景と目的】

入退院センターは、患者の身体的・社会的・精神的リスクを早期に把握し、スムーズな入退院を実現する役割があり、患者が入院前に安全に抗血栓薬等を中止するための介入をしている。薬剤に関するインシデントは年間5件程度だが、今回、薬剤に関するインシデントを分類し、今後の対応について検討した。

【取り組み】

平成25年4月から平成26年9月までの薬剤のインシデント10件をアセスメントデータベースとインシデントレポートから情報を分類し、関連性について検討した。

【結果】

インシデントの内訳は、「抗血栓薬の見落とし」2件、「休薬遅れ」1件、「薬剤抜き取り間違い」1件、「休薬中に内服」2件、「早期休薬」4件だった。今回は、共通点が多く面談時の介入が重要な「早期休薬」4件について着目し検討した。

【考按】

4件の共通項目は、「80代」「薬の管理者は本人」「抗血栓薬の内服理由を理解している」「理解力のアセスメントが良好」の４項目であった。看護師は、患者が薬剤の内服理由と効能を表現し、薬の判別が可能なことで理解力良好と判断したが、それは早期休薬のリスクを理解していることにはつながらず、看護師のアセスメントが不足していた。患者は、高齢で手術を受けること自体への不安と、休薬のリスクよりも抗血栓薬により出血しやすいと認識しているため、自己判断で早期休薬に至ったと推測する。患者に抗血栓薬の重要性の認識を確認し、出血についての不安など思いを引き出すことが大切であり、その上で抗血栓薬を休薬日まで継続する必要性を理解できる介入が重要である。薬剤の調整は自己判断せず、処方医や入退院センターへ相談するなど、具体的な方法を事前に提示することも必要と考える。高齢で薬剤を自己管理できることは大切だが、入院・手術・薬剤の休薬など通常とは異なる状況での薬剤管理を共に考え、状況により家族の協力を得るよう促す必要がある。薬剤管理に対する認識が医療者と家族で異なる場合があり、家族へは危険回避のために注意すべきことをイメージできるように、具体的な方法を掲示し説明することが重要である。